

# 学内六報

2018.7.25

no. 1512



駒場キャンパス1号館裏にて (撮影/永井久美子)



東京大学  
THE UNIVERSITY OF TOKYO

東大ウェブサイトが  
変わりました



「広報戦略2020」に基づいて利便性を向上し発信力を強化

# 東大ウェブサイトが変身!

従来のトップ画面



新しいトップ画面



UTokyo FOCUS をクリック

背景に安田講堂の線画が

UTokyo FOCUS はここからも行けます

注目情報

更新情報

## 日本語版がマルチデバイス対応に

閲覧するデバイスの画面サイズに応じてレイアウトを最適なものにするレスポンシブ・ウェブ・デザインを採用しました。従来の東大ウェブサイト（日本語版）では、パソコンのモニターでは読めるけれどもスマートフォンの小さい画面だと非常に読みにくい、という状況が続いてきましたが、もうそんな事態とは無縁です。画面幅が狭くなっても、デバイスが指定した文字サイズで表示され、文字が隠れないよう折り返されるので、ストレスなく閲覧することができます。先行してマルチデバイス対応を果たしていた英語版（中国語版・韓国語版）とデザイン基調が揃い、統一感のあるテイストが実現しました。

## 日本語版+英語版がアクセシビリティ対応に

アクセシビリティとは、近づきやすさ。年齢や身体障害の有無に関係なく、必要な情報に誰もが問題なく到達して利用できることをいいます。東大ウェブサイト（日本語版・英語版）は、今回のリニューアルで、マルチデバイス対応、他言語版ごとのデザイン基調の統一、ディレクトリ整理、情報整理の見直しを行い、アクセスした誰もが簡単に目的の情報に到達できるよう生まれ変わりました。目指したのは、JIS規格（日本工業規格）「高齢者・障害者等配慮設計指針—情報通信における機器、ソフトウェア及びサービス—第3部：ウェブコンテンツ」（JIS X 8341-3:2016）のレベルAA。3段階ある基準のうち一番厳しいAAAに次ぐレベルで、国の機関はこれに準拠しなければなりません（規格番号の「8341」は「やさしい」との語呂合わせだとか!）。リニューアル後の新しいCMSはアクセシビリティチェック機能を搭載し、エラーがあると更新者にアラートを表示して修正を促します。

## アクセシビリティチェックのNG例

内容に誤りがない、誤字がない、見出しが適切、リンク切れがない、といった基本的な項目は言わずもがなですが、記事作成時に特に気をつけたいこととして挙げられるのが、以下の3点です。

### 文字間に不要な空白が

日時：7月30日14時  
参加費：無料  
おやつ：500円まで

テキストに不要な空白があると音声ブラウザが間違った読み上げをします。「にちじ」→「ひ」「とき」のように…

### 画像代替テキストがない

```
<img src = " / content/00000000.jpg">
```

それが何の画像であるかを示す代替テキスト(altタグ/alt="xxxx")がないと、視覚障害者にとって不便です。

### 画像内の文字と背景のコントラストが不十分



文字色と背景色のコントラストを一定以上確保しないと理解が困難に。診断ツールによるチェックが必要です。

東京大学のウェブサイトが6月27日にリニューアルを果たしました。見た目はもちろんですが、機能の面でもいくつか大きな変更を施しています。そのポイントをあらためてまとめ、リニューアルを進めてきた広報室長の言葉とともに紹介します。参考に、過去1年間の記事別ページビュー数とTwitterの動向も掲載しました。ウェブサイトは大学の広報活動の肝です。有効な新機能を活用して東大の価値をどんどん発信していきましょう。



## 日本語版+英語版に UTokyo FOCUS 総合ニュースサイトを新設

### 注目記事

特に重要な記事を左に大きくスライダー表示。右にはそれに準じる注目記事を表示。

### 今後のイベント

これから開催される学内のイベント情報を、開催日が近い順にピックアップして表示。

### 最新記事

カテゴリーを問わず更新日時が新しい順に記事を表示。最新情報はここでチェック。

### 動画など

学内の注目動画コンテンツなどを表示。

### 人気記事

アクセス数が多い記事を表示。東大の人気コンテンツを知りたい人はここでチェック。

### 他媒体の注目記事

学外の主要メディアが報じた東大関連の注目記事を選び、その見出しを表示します。

従来は「重要なお知らせ」「トピックス」「お知らせ」「イベント」「UTokyo Research」に分類されていた全学ニュースが、総合ニュースサイト「UTokyo FOCUS」として生まれ変わりました（日本語版・英語版）。大学の基本情報を集めたトップ画面とこのUTokyo FOCUSは1クリックで行き来が可能。これまでと同様、各部局・部署から投稿いただいた記事を集積し、SNSやレコメンド機能、タグ機能を用いて拡散することを目指しています（特集記事を広報戦略本部が企画して掲載するケースもあり）。東大の多様な学術資源や教育活動の価値を可視化し世界に発信するこの場合は、日々刻々と更新され続けていきます。

### UTokyo FOCUS の 5 大分類

- 1  
FEATURES
- 2  
ARTICLES
- 3  
EVENTS
- 4  
PRESS  
RELEASES
- 5  
JOBS

1は特集（2から選出する場合も）。2はトピックス記事やお知らせ記事。3はイベントの告知記事。4は研究成果発表をはじめとしたプレスリリース情報。5はリクルート情報。

## 日本語版+英語版に ページ間連携機能を搭載

教員検索機能、タグ管理機能、レコメンド機能など、ウェブサイト全般においてページ間連携機能を強化しているのもリニューアルの大きなポイントです。たとえば、ある研究者のページを表示すると、専門分野が近い研究者のページや過去の研究紹介コンテンツなどへのリンクが掲載されており、一つの記事を



たとえば「総長室だより」のページにはこんな関連記事が自動表示されています。

読めば関連する情報が自動的に手に入ります。特に目的がないという場合でも、サイト内を放浪していれば、その時々で面白いUTokyoコンテンツに遭遇できるはず。ヒマなときはとりあえず東大ウェブサイトに行ってみる。今後の新習慣としておすすめです。





## (参考) 東大ウェブサイト記事の人気傾向を知ろう

### ○この1年の人気記事ベスト20 (2017年4月～2018年3月/6月20日測定) ページビュー

1	『日本人は集団主義的』という通説は誤り プレスリリース	36182
2	中央食堂リニューアル事業へのご支援をお願いいたします! お知らせ	16469
3	指定国立大学法人の指定について お知らせ	13865
4	高大接続研究開発センター主催シンポジウム「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって」 イベント	13658
5	創設140周年企画「東京大学キャッチコピー」の募集について お知らせ	10577
6	光触媒の新世界 UTokyo Research	8732
7	ニューロインテリジェンス国際研究機構 (IRCN) が世界トップレベル研究拠点プログラム (WPI) に採択 トピックス	6986
8	時計の概念を巻き直す「光格子時計」 UTokyo Research	6978
9	総合研究博物館スクール・モバイルミュージアム『東大昆虫館』 イベント	6674
10	見えてきた「宇宙のはじまり」 UTokyo Research	6620
11	脳の糸くずのない未来 UTokyo Research	5999
12	実データで学ぶ人工知能講座 (AI データフロンティアコース) 開設のご案内 イベント	5871
13	東京大学学務システムの切り替えについて お知らせ	5768
14	筋萎縮性側索硬化症の治療法に向けて UTokyo Research	5692
15	社会に潜む格差を見つめ続けて60年 UTokyo Research	4471
16	シャネル株式会社代表取締役社長 リシャール・コラス様 プレミアム・サロン	4390
17	脳てんかんの原因を解明—てんかんは幼少時の高熱に起因— プレスリリース	4202
18	「平成29年度東京大学卓越研究員」21名決定 トピックス	4129
19	レクチャー・シリーズ「東大教室2017夏」 イベント	4090
20	株式会社ポイント代表取締役会長兼社長 福田三千男様 プレミアム・サロン	4016

Google Analyticsでこの1年のアクセス数を調べてみました。トップページ (298万pv) をはじめとする基本ページ系や入試情報、不祥事関連のページ等以外でpvが最多だったのは、2009年の高野陽太郎教授 (当時・人文社会系研究科) のプレスリリース。9年の時を経てなお影響力の大きい研究であることが見て取れます。2位は中央食堂リニューアルへの支援のお願い。長く「お知らせ」欄に掲出てきた成果でしょうか。3位は指定国立大学に選ばれた際のお知らせ。申請に際してがんばった教職員の皆さんに伝えたいところです。4位には世間の注目を集めた英語試験関連のイベント、5位にはキャッチコピー募集のお知らせがランクイン。6位には橋本和仁教授 (当時・工学系研究科) の2014年の記事、8位には香取秀俊教授 (工学系研究科) の2015年の記事、10位には佐藤勝彦名誉教授 (理学系研究科) の2015年の記事と、過去の「UTokyo Research」記事3つが十傑入り。11位、14位、15位、17位からも、研究記事が根強く読まれ続けていることがわかります。そんな中、7位のIRCNの記事は2017年9月と比較的最近のもの。新しい機構への期待度の高さが窺えます。その他、9位、19位に入った博物館のイベント情報、16位、20位に入った卒業生室のプレミアム・サロン記事、18位の卓越研究員決定のトピックスも特筆すべき人気を示していました。

### ○Twitter RT+いいねベスト15 (2017年6月～2018年5月/6月22日測定) RT いいね 合計

1	【お知らせ】(東大基金) 量子コンピューター研究支援基金のお願い	806	777	1583
2	【YouTube】理学系研究科と国立天文台における「重大な研究成果に関する発表会見」	716	823	1539
3	【UTokyoResearch】1つのアミノ酸の違いが日本人胃がん多発の背景に	203	374	577
4	【UTokyoResearch】北斎の青とセルロースナノファイバーで被災地除染へ	252	281	533
5	【Topic】2018年 五神総長年頭挨拶	172	348	520
6	【お知らせ】東京大学学生を対象としたコミュニケーション・セミナーを開催	183	210	393
7	【YouTube】#理学部 加藤見史准教授の研究者ビデオ「数学で自然界を表す#ひも理論を解く」	108	271	379
8	【Topic】陸上運動部近藤選手の箱根駅伝出場が内定しました!	45	241	286
9	【最終講義】<YouTube中継> 理学系研究科 駒宮幸男教授の最終講義	91	134	225
10	【Topic】軟式野球部が東京六大学軟式野球秋季リーグ戦で優勝!	56	168	224
11	【Topic】硬式野球部宮谷投手が北海道日本ハムファイターズから7位指名!	55	144	199
12	【Topic】平成30年度学部入学式を挙行	45	142	187
13	【お知らせ】新コース開講! 東大発の無料オンライン英語講座!	44	143	187
14	【Topic】UTOKYO VOICES 010 - 薬学研究科 薬品作用学教室 教授 池谷裕二	42	144	186
15	【淡青】硬式野球部ユニフォームの変遷	65	104	169

SNSでの反応数では、東大基金のお願いが首位に。古澤明教授 (工学系研究科) の研究を支援する熱が高まりを見せています。2位、7位、9位は理学系のYouTube紹介。活発に動画を発信している部局の面目躍如です。3-4位には「UTokyo Research」更新のお知らせ、5位には元旦恒例の総長挨拶、6位には相談ネットワーク本部のセミナー情報が。総長挨拶、入学式、4件入った運動会関連記事、大総センターの英語講座告知など、RTよりもいいねが付きやすいタイプのツイートがあるようです。広報戦略本部入魂の「UTOKYO VOICES」では池谷裕二先生の回が人気でした。

### UTokyo FOCUS を盛り上げる

### 広報戦略本部 「研究広報チーム」

よろしくお祈りします!

「広報戦略2020」が掲げる国際広報の強化の一環として、英語による研究広報を得意とする精鋭スタッフが集結しました。研究者へのインタビューを経て原稿づくりを行う英語プレスリリース、老舗英字新聞で培った取材力に基づく研究紹介原稿、イギリスBBC仕込みの編集テクニックで彩る研究紹介動画、アメリカ・オーストラリア・カンボジアで鍛えたコミュニケーション力を駆使するワークショップなどなどで、東大の研究の魅力を続々と発信していきます。



動画スペシャリスト  
メラー・ロワン

取材記者歴 20年  
小竹朝子

ワークショップ名人  
デヴァ・ケイトリン

英語原稿の番人  
クリッシャー・ジョセフ

国際広報の司令塔  
マックイ・ユアン

# 広報室長に聞きました



広報室長  
情報理工学系研究科教授

## 須田礼仁

※CMSはContent Management Systemの略で、日本語で言えばウェブサイト管理システム。ウェブ制作に関する専門知識がなくても、テキストや画像などの情報を入力していくだけで、サイトの制作や管理が容易にできます。

須田先生のおまけトーク「今回のリニューアルに向けて、国内外の大学をはじめ、たくさんのウェブサイトを開覧しました。長いこと放置している自分の研究室のホームページもなんとなく嫌いといけなげ、と感じさせられました」

### ●トップページの変遷



## 広報にはウェブが最重要

東大の日本語ウェブサイトについては、マルチデバイス対応になっていないことが以前から問題点として指摘されてきました。パソコン以外のデバイス、つまり、多くの人が日常的に使っているスマートフォンやタブレット端末で閲覧しにくかったということです。英語サイトについてはすでに2015年度のリニューアルで対応していましたが、日本語サイトではこの部分の対応が遅れていました。ページ数が1万近くにもなる巨大サイトの改修には多大なコストと手間が必要となるため、なかなか着手できずにいたというのが実状です。

しかし、「東京大学ビジョン2020」が目指す広報を実現するべく策定した「広報戦略2020」において、広報活動の目標を定義したのを機に、サイトリニューアルの必要性がより明確となりました。教育と研究の多様性・卓越性の可視化、世界の公共に資する姿の可視化、信頼できる大学というブランドイメージの構築という3つの広報目標を実現するには、ウェブサイトの強化こそ最重要だということを確認するに至りました。たとえば、東大に関する情報を探す際、トップページから目的の情報にたどりつくのに時間がかかってしまうと、必要な情報がpdfでしか掲載されていないというようなことは、広報活動においては非常に大きな問題となるわけです。そこで、2016年度からリニューアルの検討を本格的に始め、予算獲得、仕様の決定、CMS※の選定といった数々の準備を現場で進めてきて、ついにこのたびのリニューアルにこぎつけたという次第です。

デザイン面については、先行リニューアルを経て好評を得ていた英語版サイトに合わせるという方向性を、早くに決めました。異なる言語バージョンでも大学として統一したイメージを示すべきだというのが理由です。もう一つ重要だと考えたのは、アクセシビリティの改良です。身体に障がいや不自由を持つウェブ利用

者にも配慮し、アクセスした誰もが容易に目的に到達できるようにするにはいくつもの重要な基準があります。それらをクリアすることは、公共性に奉仕することを標榜する大学として不可欠でした。

## UTokyo FOCUS に投稿を

そして、今回最も力を入れたのが、UTokyo FOCUSと名付けた総合ニュースサイトの整備です。大学全体では膨大な情報がありますが、それらはさまざまな部局・部署のサイトにバラバラに存在しており、明確な意志でもないとなかなかたどりつけませんでした。そこで、全学に散らばっている情報を集積し、効果的に可視化して拡散させるために、海外のトップクラスの大学の中で広がっているやり方の導入を検討し、従来の全学ニュース欄を一新したのです。5項目（FEATURES、ARTICLES、EVENTS、PRESS RELEASES、JOBS）にクラス分けされた記事は、キーワードタグや教員タグ、内容の相関性、利用者の行動履歴などによって相互に関連づけられます。一つの記事を表示しただけで学内の関連情報を芋づる式に、また、ダイナミックに得ることができるわけです。その時々の人気記事を表示する機能や、学内のイベント情報をカレンダー式に表示する機能もあります。いま東大で何が起きているのか、その全容をつかめるような場となっています。

今回のリニューアルで、場の用意はできました。しかし、この場が本当に充実したものになるかどうか、東大の顔たるウェブサイトが真に素晴らしいものになるかどうかは、これを読んでいる各部局・部署の皆さんにかかっています。新しい仕様となったCMS経由で、UTokyo FOCUSにどんどん情報を寄せてくださるよう、また、東大の価値を高める情報の拡散にご協力くださるよう、あらためてお願い申し上げます。





教養教育の現場から

第28回

## リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学のすべての構成員が知っておくべき教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

## 三本の柱で構築される「リベラルアーツ・プログラム」

／国際連携部門の新部門長に聞く

お話／総合文化研究科 教授  
国際連携部門

原 和之



## 2005年から続く南京との交流

——国際連携部門の新部門長ですね。

「刈間文俊先生のご退任を機に引き継ぎました。当部門では、教養教育の海外発信と新たな国際交流モデルの提案、グローバル人材の育成を目指す教育活動として「リベラルアーツ・プログラム」(LAP)を2005年から実施しています。今回は、大別すると3つの活動で構成されるLAPについて改めて紹介させていただきます。一つ目は、中国の南京大学と提携して行っているゼンショー東京大学・南京リベラルアーツ・学生交流プログラムです」

——牛井の「すき家」の会社ですか。

「はい。創業者で会長兼社長の小川賢太郎さんが本学ご出身だった縁で2013年から始まったプログラムです。5年で一区切りでしたが、2期目はさらに手厚いご支援をいただいています。東大生が南京で南大生とともに行うフィールドワーク(3月)、南京でのサマースクール(8月)、北京での中国語研修(10~11月)、南大生・東大生共同のフィールドワークを含む東大体験プログラム(11月)という活動を

行っています。双方の学生がともに行動しながら信頼を育むことを目指しています」

## 中国での講義を駒場にも還元

「南大でのフィールドワークの際には、東大の教員を派遣して南大生向け集中講義も行っています。特徴的なのは、そのときと同じテーマを扱うオムニバス講義を駒場で開講していることです。これまで、変容、水、排泄、鏡、色、家と、異分野間に横串を通せるようなテーマで続けてきました。中国での講義の成果を東大生にフィードバックする形です」

——プログラムに参加しなかった学生にも連携の果実が届けられる、と。

「それによって中国と日本の学生が同じテーマを共有できることが重要だと考えています。二つ目は、国連と文化、国連とインクルージョン、国連勉強会からなる国際機関プログラムです。国連職員としてSDGs策定にも関わってきた先生の着任を機に、学生にもっと国際機関の現状を知ってもらおうということで始めました。UNiTe、EMPOWER Projectなど、学生団体の自主的な活動と連動し

ながら運用しているのが特徴です」

「三つ目は、メルボルン・プロジェクトです。オーストラリアのメルボルン大学と東大の教員が行き来しながら最新の知の形を探索する取り組みです。従来は不定期でワークショップなどを重ねてきましたが、今後は定期化の方向です。メルボルン大学は特にジェンダー研究に強みがあるので、ダイバーシティ分野での連携を強める予定です。また、学部の学生だけでなく大学院生まで含めた交流を目指しています。実は、以前駒場の留学生だった人がメルボルン大学で教員となり、架け橋となってくれているんです」

——素敵な連携ですね。最後に教養教育と今後の展開についてお願いします。

「自らのフィールドの外に出ていく際のフットワークを支えるのが教養だと私は思います。異文化・異分野に対して持っている先入見を揺るがし、のりこえるためのリベラルアーツ教育を、部門長として促進します。現在は中国、オーストラリアとの連携が主ですが、将来的には、自分の研究と縁があるフランスをはじめ、ほかの国・地域とも連携したいですね」



①LAPの字を表したリベラルアーツ・プログラムのロゴ。②南京で南大生と東大生が組んで行うフィールドワークより。③国際機関プログラムより。④南京での集中講義より。⑤駒場で行われたオムニバス講義「家」のポスター。





## 総長室だより 第12回

～ 思いを伝える生声コラム～

東京大学第30代総長

五神 真



### 良い社会のためのESG投資とSDGs

先月号では、デジタル革命が進む中で、人類社会を良くする駆動力を大学が中心となって生み出すべきという話をしました。科学技術の革新、社会システム、経済メカニズムの3つを連携させ、高いビジョンを共感しつつ協働する場をつくる。そこに多くの人々が参加するためには経済メカニズムの駆動が重要です。

知や情報が価値創造の源泉となる知識集約型社会では、高度な知と技とそれを支える人材が集まる大学こそが、産業創出の場となりうる。総長室には世界から様々な経営者や投資家が訪れます。東大が蓄積する日本独自の学術や文化や最先端技術を投資の対象と感じているのでしょう。しかし国内では大学への投資の気運が、欧米や中国、韓国に比べ、高いとは言えません。

そもそも日本にはリスク投資文化が定着していません。企業の売上高に対する株式時価総額をみると、日本が強みを有する大手製造業で1倍未満。アリババなど、中国のIT系有力3社の平均は16.6倍です。世界では、ビジョンや社会課題解決のアイデアへの期待感で投資が集まり、それが経済を動かす産業成長の仕組みが機能しています。一方、日本は、20年前に銀行が機能不全に陥った金融危機とその後のデフレで、銀行の融資行動はより保守的になり、また人々もお金をより安全な貯蓄に回すことが習慣化しました。資本集約型に向かう高度経済成長期は成長の道筋が明確で、手堅い融資が堅実な成長を支えました。しかし変革期では見えない未来への果敢な投資が勝負。成長のためにリスク投資の文化を醸成し、ベンチャーなど新しいチャレンジを力強く応援する仕組みが必要なのです。

一方、成熟した企業では、ESG (Environment, Social, Governance) 投資が鍵となります。年金運用など長期リターンを確実に確保する際、財務情報だけでなく、環境問題など社会課題への取り組みを評価する投資手法です。国連は資本主義をより健全なものとする視点で2006年に「責任投資原則」を提唱しています。現在では多くの投資家へと広まり、企業はこれに対応することで事業機会を増やし、長期的な成長に繋がると意識しています。経団連が企業行動憲章にSDGsを取り入れたこともそのあらわれです。

東京大学の未来社会協創推進本部 (FSI) における企業との連携はこの新たな資金の動きに整合します。東大と連携してSDGsに取り組むことは、ESG評価向上に繋がり、企業が東大と組むメリットが生まれるのです。FSIを通じ、より多くの投資が大学や企業に循環する仕組みを創っていくことは、資本主義をより良い方向に向けることにも繋がると期待しています。

## シリーズ 第15回 連携研究機構

微生物科学イノベーション連携研究機構

の巻



話／機構長  
妹尾啓史先生

### 小さな生物の大きな力をフル活用

——微生物とは、どういうものをいいますか。

「肉眼では見えないくらい小さい生物で、細菌、カビ、酵母などが代表的です。こうした微生物の応用技術では日本が世界の先端を走ってきました。酒や醤油などの発酵食品、抗生物質、農業、環境、物質生産、健康など、微生物は地球環境から人まで広く関わります」

——東大の微生物研究ではどんな例がありますか。

「UTCC\*の泡盛「御酒」が発酵学の世界的権威・坂口謹一郎先生が残した黒麹菌によるのは有名でしょうか。うまみ調味料につながるアミノ酸・核酸発酵の技術、チーズに必要な凝乳酵素、コレステロールの原料になるメバロン酸の発見なども東大の研究が由来です」

「近年はDNA解析やゲノム編集技術などが急速に発展し、新段階に入った微生物科学を統合的に進める組織が必要だという機運が、世界的に広がっています。日本では東大が率先しようと、農学生命科学研究科と生物生産工学研究センターを中心に2年前から検討を始めました。関連部局を行脚したところ、前向きな反応が多く、機構設立に至った次第です。微生物の機能を用いて人類社会により結果をもたらすのが目標です」

「組織的には、新素材や新薬などのものづくり、環境・エネルギー、農業生産・生態系という3つの研究ユニットを、基礎・基盤技術整備ユニットが支える構成で、5研究科・3研究所・2センターから60人超の研究者が参画しています。8月21日には農学部弥生講堂で発足記念式典・シンポジウムを行う予定です。研究機構ですが、将来的には教育活動、たとえば微生物に関わる企業と学生をつなげる仕組みなども考えたいですね」

——微生物というのは万能なのでしょうか。

「そう信じています。昔から「微生物に不可能はない」といわれ、可能性は計り知れませんが、まだ全体の1%程度しか利用できていないのが現状です。生物多様性という昆虫が有名ですが、微生物も同じぐらい多様です。特に遺伝子の種類が多く、ゆえに発現する機能が多様で、何でもできる可能性も高いわけです」

——略称、ロゴ(→)の紹介と、最後に教職員へのメッセージを。

「内輪では、英語名 (Collaborative Research Institute for Innovative Microbiology) の頭文字をつなげて「クリーム」と呼んでいます。ロゴの「i」はinnovationのiと人の姿、黄緑部はmicrobiology、manufactureのmとDNA、下の楕円部はバクテリアを示します。もし学内に私たちが見落としている微生物研究者がいたら、ご一報を！」



\*UTCC=東京大学コミュニケーションセンター



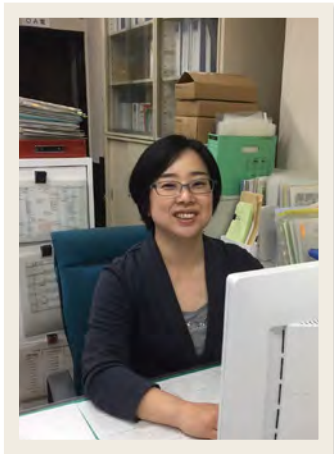
## ワタシのオシゴト 第147回

RELAY COLUMN

医学系研究科経理係  
係長

森 有子

## 毎日が勉強です



ここで働いています。

はじめまして。医学部経理係にきてからちょうど2年になりました。いろいろな意味でようやく慣れてきた感じです(遅いっ!?)。

経理係では、給与、謝金、旅費

が主な業務です。私自身はそのうちの常勤教職員の給与と少しの旅費を担当しています。

給与は毎月の給与支払いと年に1度の年末調整があり、多かれ少なかれみなさまの生活に直結する業務です。なので、誤りのないよう常に細心の注意を払って業務をしています。一方、旅費は行程を想像しながらやると(仕事ではありませんが)少し楽しみながら、業務をやっていくことができます。

好きなことは博物館や美術館に行くことです。京都国立博物館で初めて出会った伊藤若冲の緻密な絵に感動し、一昨年に東京都立美術館で再会して改めて感動しました。

これからも楽しくお互いに支え合いながら大学の一員として、貢献していきたいと思います。



医学部2号館前のグルグルベンチ(?)にて、係のみんなと。

得意ワザ：イヤなことはすぐに忘れること

自分の性格：おおざっぱな小心者

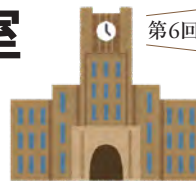
次回執筆者のご指名：山縣真依子さん

次回執筆者との関係：頼りない係長をかなり支えていただきました

次回執筆者の紹介：丁寧な仕事ぶりに頭が上がりません！

IRデータ室  
よもやま話

第6回



経済学研究科教授 大日方隆

## 東京大学の自画像

こんな光景をみかけたことがありますか。自分の体の幅よりも大きなランドセルを背負った低学年の小学生が、電車の中で人混みをかき分けて進もうとして、ランドセルが大人たちの腿あたりにぶつかってしまう……。なんとも、微笑ましいですね。きっとまだ、ランドセルの幅の感覚がわかっていないのでしょう。

さて、私たちは、東京大学の体の幅(=現状)と背負っているランドセルの幅(=社会から期待されている役割)とが、どのような関係にあるのか、明確に理解しているでしょうか。明確に解答できる人は、けっして多くないと思います。小学生の話ならば微笑ましくていいですが、東京大学の場合、笑い話ではすませられません。自分の体のことを理解することが、なによりもまず必要です。IRというのは、東京大学が自分の体の幅、その現状を把握しようとするものです。

ところが、いうまでもなく東京大学は実に巨大な組織であり、多様な人々が集い、さまざまな活動をしています。その現状を把握するといっても、簡単ではありません。自画像は、どの側面に光(焦点)をあて、どこを強調して、どのような太さで線を描き、どこに何色を塗るのかなどによって、まったく違う絵が描けます。それと同じように、IRで描こうとする東京大学の自画像の書き方にも、規定のルールや技法があたえられているわけではありません。

かくいう私には、絵心はまったくありません。七夕の短冊に挿絵を描くと、家内には「画伯!」とTVのギャグで揶揄されます。しかし、IRの作業において、絵心のない「画伯」では……。各方面の関係者にいろいろ教えてもらいながら、IRデータ室は全員が協働で「東京大学の自画像」を描こうとしています。東京大学らしさを表現するには、どのような自画像がいいのか、構成員皆様のご意見を聞かせていただき、この協働作業に参加してもらえると、幸いです。



東大の自画像、ではなく、イラスト素材サイト(kids.wanpug.com)より。「なんだかうちの娘にも似てる」と大日方先生。

IRデータ室 ir-data.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp



# インタープリターズ・第132回 バイブル

医学系研究科 講師  
教養学部附属教養教育高度化機構  
科学技術インタープリター養成部門

孫 大輔

## 対話(ダイアログ)と医療

「対話する医療：人間全体を診て癒すために」(さくら舎)という単著を今年の2月に上梓した。以来、対話と医療に関するテーマで講演依頼などをいくつか受けるようになった。

「対話」というとてもシンプルな行為に関して、意外にも医療の世界ではあまり正面から取り組まれてこなかったように思う。というのも、医療コミュニケーションにおいては「対話」(ダイアログ)の位置付けは明確でないからだ。

「対話」に近い概念として「熟議」(デリベレーション)という言葉がある。1992年のEmanuelらの論文で、医療コミュニケーションの4つのモデルの一つとして「熟議モデル」が提唱されている。これは、医師が患者に情報を解釈して説明するだけでなく、患者の価値観も考慮して「友人」のように相談に乗るというモデルである。このモデルでは、医師は患者の考えや価値観に応答しながら、医師自身の考えも変容する可能性をはらんでいるという意味で「対話的」である。

「対話」の原則には、この「応答性」が重要であると指摘したのは、ロシアの言語学者ミハイル・バフチンである。バフチンは「言葉にとって、応答の欠如よりも恐ろしいものはない」と述べ、対話の空間においては「応答」しあう多数の声が「ポリフォニー」という状態を作ると考えた。ポリフォニーの原則、すなわち、対話においては複数の「声」(視点)が応答しあう形で含まれる方が良いという考えは、対話を精神疾患の治療的アプローチで用いる「オープンダイアログ」でも重視されている。

医療コミュニケーションにおける「対話モデル」は、現代の医療現場にさまざまな形で応用可能である。このモデルでは、医療専門職は患者の考えに常に「応答」し、対等な立場で双方向のやりとりをすること、また患者の価値観にオープンに接し、自分の考えも変容するかもしれないという姿勢で臨むことが重要となる。そして、終末期医療に関する意思決定など、医療者と患者・家族との難しい話し合いの場やコミュニケーションの場面において、この「対話モデル」が大いに役に立つのではないかと筆者は考えている。

科学技術インタープリター養成プログラム

# いちょうの 部屋

学内マスコット放談



今回のゲスト

**イチ公** さん

Ichi-ko

東京大学運動会マスコット

「イチ公」の命名は旧制一高との掛け合わせから。胸の銀杏マークと学帽は東京大学の自負を表現している。

いちょう●キミの活躍ぶりは本誌でも何度か見ているよ。1482号と1489号では表紙も飾っていたもんだね。ちなみにあの忠犬ハチ公とはどういうご関係なの？  
イチ公◆か、関係もなにも……。ハチ公さんはもちろん心から尊敬するスーパーヒーローの大先輩だワン！  
い●昔は名前がナナ公だったと聞いたけど、ほんと？  
イ◆違うワン！東大が七大戦(全国七大学総合体育大会)の主管校を務めた2009年に大会マスコットとして生まれたのがナナ公で、実はボクのお兄さんなんだワン。  
い●ふーん。お兄さんは9歳だよ。キミは何歳？  
イ◆それはトップシークレットだワン。  
い●なるほどですね。どこに住んでるの？倉庫？  
イ◆第2食堂2階にある運動会総務部の部室で寝起きしているワン。総務部のみんなが掃除してくれるから快適だワン。風呂には入らないけど日光浴もするワン。  
い●やきとりが好きなんだってね。タレ派？塩派？  
イ◆ボクの好物は敬愛するハチ公先輩といっしょだワン。まあ、どちらかといえば塩のほうが好みだワン。  
い●何か悩んである？真夏の出勤は辛い、とか？  
イ◆運動会主催のイベントを盛り上げたり、運動部の試合を応援するのが大好きなんだけど、どうしても多くの部の試合が日曜日に重なってしまうから、全部は応援に行けないことかな……。だワン。  
い●友達はあるの？めいちゃん？ユータス君？  
こ◆残念ながら東大の皆と会う機会は少ないワン。でも名古屋のなごすけ、東北の宗たん、北海道のええぞうなど、七大戦のマスコットは皆友達だワン。自転車点検のイベントでピーボ君とも仲良くなったんだワン。  
い●へー、外とのつきあいが多くなって羨ましいね。商売上手との噂もあるけど、実際のところ、どう？  
イ◆学生支援センターの運動会窓口で販売中のぬいぐるみ(1620円)、3月にリリースしたLINEスタンプ、五月祭で販売したイチ公焼き(今川焼き)……と、おかげさまでイチ公グッズは大好評だワン！もちろん売上は運動会の活動の支援に役立っているワン。まだ買ってない人は要チェックだワン。ちなみに8月は総務部員が各地のスポーティア(保健体育祭)に行つてぬいぐるみを売る予定だワン。教職員の皆さん、夏休みはスポーティアで会いましょう、だワン！  
い●スポーティア、いちょうも利用できるのかな……。



[www.undou-kai.com/ichikou/](http://www.undou-kai.com/ichikou/)



**トピックス** 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features,Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル
6月15日	先端科学技術研究センター	熊本県との連携研究活動を加速する、せんたん研究員を任命
6月21日	先端科学技術研究センター	オーストラリアクイーンズランド州アナスタシア・バラシェ首相兼貿易大臣が先端研を訪問
6月22日	本部奨学厚生課	大阪府北部を震源とする地震で被災した世帯の学生の皆さんへ
6月25日	本部広報課／法学政治学研究科・法学部	岩澤雄司教授（大学院法学政治学研究科）が国際司法裁判所（ICJ）裁判官に選出
6月27日	本部広報課	東大のウェブサイトが大きく生まれ変わりました
6月28日	本部総務課	平成30年度 秋季入学式について／平成30年度 秋季学位記授与式・卒業式について
6月29日	本部広報課／法学政治学研究科・法学部	国際司法裁判所裁判官に就任する岩澤雄司教授が総長と懇談
6月29日	東洋文化研究所	斯波義信先生（本学名誉教授、東洋文化研究所前所長）が唐奨漢学賞を受賞
7月2日	本部広報課	北京出張とFSI   総長室だより～思いを伝える生声コラム～第11回
7月2日	本部人事給与課	平成30年度名誉教授の称号授与
7月3日	人文社会系研究科・文学部	第9回東京大学文学部公開講座を開催しました
7月3日	教育学部附属中等教育学校	体育祭が行われました／70周年記念式典行われる
7月4日	大学総合教育研究センター	「英語で教えるスキルを磨くワークショップ」開催
7月5日	本部学術振興課	『研究者一人一人を支援します!』『研究者支援制度パンフレット』が完成しました
7月5日	本部広報課	広報センター夏期臨時休館のお知らせ
7月6日	理学系研究科・理学部	大越慎一教授（化学専攻）がフランス・レンヌ市から表彰
7月9日	低温センター	平成30年度低温センター安全講習会（第1回、2回、3回）開催報告



## CLOSE UP

### くまモンを「せんたん研究員」に任命

（先端科学技術研究センター）



VRくまモン体験会場の参加者にアピールするくまモン。

（c）2010熊本県くまモン

先端研と自治体連携協定を結んでいる熊本県の人気キャラクター「くまモン」が先端研の「せんたん研究員」に任命されました。連携の一環として、先端研の檜山敦講師は昨年9月設立の「くまモン共有空間拡大ラボ（くまラボ）」のフェロー（研究員）として「くまモンとふれあえる人工現実（VR）世界の開発」に取り組んできました。くまモンが研究員として先端研での研究活動に参加することで、この研究の展開や加速化を図ることを目的としたものです。

辞令交付式は6月9日に駒場IIキャンパスで開

催された駒場リサーチキャンパス公開2018のイベント「VRくまモン体験会」内で行われました。舞台上で参加者がゴーグルを覗いてVR空間でくまモンと遊ぶ体験の最中にサプライズで登場したくまモン。驚く観客を前に、先端研の研究員に任命されたことが司会から紹介されました。続いて神崎亮平所長から辞令と研究員証と激励の言葉を受けたくまモンは、「東大先端研で研究員に任命していただいて、とってもうれしかモン！これからがんばっていくモン」と意気込みを語りました。



## CLOSE UP

### 岩澤雄司教授が国際司法裁判所裁判官に

（法学政治学研究科・法学部）



6月29日に岩村正彦研究科長と総長室を訪れ、五神真総長への報告と懇談を行った岩澤教授。

6月22日、国連において、小和田恒・国際司法裁判所（ICJ）裁判官の辞職に伴う裁判官補欠選挙が行われ、法学政治学研究科の岩澤雄司教授が、同裁判官に選出されました。日本からの選出は4人目、本学の現役教員から選ばれるのは初の快挙です。国際法に基づく裁判で国家間の紛争を平和的に解決することを任務として1945年に設立された国際司法裁判所は、15名の独立・公平な裁判官により構成される国連の主要な司法機関であり、国際法上のすべての問

題を付託できるという普遍的性格を有する唯一の国際司法機関です。今回の選出は、国際的に高く評価されている国際法についての研究業績を基礎として、自由権規約委員会委員長やアジア開発銀行行政裁判所裁判官をはじめとして豊富な実務経験を重ねてきた岩澤教授のこれまでの取組みが国際的に認められたものです。東京大学憲章が理念に掲げる「世界の公共性に奉仕する大学」として、非常に誇らしいことです。岩澤教授のさらなるご活躍に期待いたします。





CLOSE UP

文学部公開講座「天皇と天皇制を考える」を開催

(人文社会系研究科・文学部)



講義を行う加藤教授。

6月16日、本郷・法文2号館において第9回東京大学文学部公開講座を開催しました。今回のテーマは「天皇と天皇制を考える～近代史の視点から～」、講師は本研究科の加藤陽子教授(日本史学)が務めました。本公開講座は、平成12年から北海道北見市常呂町で開催している「東京大学文学部常呂公開講座」をより多くの方に発信し、社会連携を一層深めることを目的として、本郷キャンパスにおいても開講しているものです。秋山副研究科長による司会のもと、

冒頭に佐藤健二人文社会系研究科長・文学部長から開会の挨拶があり、本講座への期待が語られました。加藤教授の講義は、ユーモアを交えた親しみやすい語り口により、一般の方にも分かりやすい形ですすめられました。今回は、本会場、中継会場を合わせて330名近くの参加者を数えました。参加者からは、「講師の話がとても面白く勉強になった」、「天皇制について考えるうえでのヒントになった」といった感想が多く寄せられ、大変充実した講座となりました。



CLOSE UP

中野の附属学校の70周年記念式典を開催

(教育学部附属中等教育学校)



記念式典会場となった安田講堂。

6月1日、本郷・安田講堂で、教育学部附属中等教育学校の70周年記念式典を行いました。

第一部では、まず勝野正章学校長(教育学研究科教授)が挨拶で、「民主的で平和な社会を育成してほしいこと」「生徒たちが主人公の式典であること」を述べました。次に、五神真総長は「附属学校は東大にとっても貴重な資源であること」「変化に出会ったときにチャンスであるとポジティブにとらえること」などを式辞として述べました。その後、教育学研究科長の小玉重夫教授は「附属学校の方が1948年創立と、教育学部より1年古い歴史をもつこと」「本校が

教育学部をつくり育ててきたことは重要な意味をもっていること」などを祝辞として述べました。最後に、生徒会長の益田耕佑さん(5年生・69回生)は、「歴代の先輩がたの知恵と努力で今があり、また、明日から日常が始まる」と80周年に向けた決意を述べました。

第二部では、生徒会制作70周年記念映像「歩(あゆみ)」が上映されました。また、卒業生を含めた7名が、能楽の儀礼曲「三番叟」を披露しました。教育学部附属中等教育学校は、教育学部、東京大学と連携しながら、日本の教育をリードできるような存在であり続けます。



CLOSE UP

「英語で教えるスキルを磨くワークショップ」開催 (大学総合教育研究センター)



ワークショップの様子。

PAGEのウェブサイト→[www.utokyofd.com/page/project.html](http://www.utokyofd.com/page/project.html)

大学総合教育研究センターのプロジェクト「Professional and Global Educators' Community (PAGE)」では、「英語で教えるスキルを磨くワークショップ」を、本郷・薬学教育研究棟で開催しました。英語で授業を行う際に役立つ英語表現と教授方法を学べるというものです。人文社会系、法学政治学、教育学、医学系、工学系、理学系と多分野にわたった参加者は、2～3名のグループに分かれて英語で5分間の模擬授業を行い、講師と参加者からフィードバックを受けました。授業のテーマは分子生物学、生命科学、ユダヤ史など様々でした。その後、教授法(インストラクショナルデザイン)に関するレクチャー、役立つ英語表現の学習、模擬授業の発表方法を改善する個人ワークの時間などを経て、二度目の模擬授業を行いました。参加者は、前の時間に学んだ英語表現や教授法をそれぞれ取り入れて、自分の授業をブラッシュアップしている様子でした。今後もPAGEでは継続的にワークショップを行う予定です。

ドバックを受けました。授業のテーマは分子生物学、生命科学、ユダヤ史など様々でした。その後、教授法(インストラクショナルデザイン)に関するレクチャー、役立つ英語表現の学習、模擬授業の発表方法を改善する個人ワークの時間などを経て、二度目の模擬授業を行いました。参加者は、前の時間に学んだ英語表現や教授法をそれぞれ取り入れて、自分の授業をブラッシュアップしている様子でした。今後もPAGEでは継続的にワークショップを行う予定です。



CLOSE UP

大越慎一教授がレンヌ市から表彰されました

(理学系研究科・理学部)



フランスを代表する歴史的建造物として知られるレンヌ市庁舎で行われた表彰式にて。右から3人目が大越教授(2人目は東工大の腰原教授)。

6月12日、フランスCNRS 国際共同研究所(LIA IM-LED)主催の“物質の超高速制御に関する国際会議(UCM2018)”のレセプションが、レンヌ市長の招きでレンヌ市庁舎にて催され、大越慎一教授(化学専攻)と東京大学が、レンヌ市より表彰されました。表彰式では、大越教授が、光材料分野にて新物質を次々と発見し、世界的に傑出した研究業績を挙げ、フランス学術界にも大きな影響を及ぼしたことが高く評価された旨が述べられました。また、2017年のLIA IM-LEDの発足に大越教授が大変に尽力し、

レンヌ第1大学をはじめとする日仏8大学間の日仏研究交流に多大な貢献をしたとして厚い謝辞を贈られ、東京工業大学の腰原伸也教授とともに、副賞も授与されました。大越教授の傑出した研究成果に敬意を表すと共に、フランス・レンヌ市への大越教授のご貢献への表彰に対し、心よりお祝い申し上げます。大越教授は、フランスパリ第6大学(ピエール・エ・マリー・キュリー大学、ソルボンヌ大学)およびボルドー大学の客員教授も務めており、フランスでの益々のご活躍が期待されます。







## 人工知能

最近、知人と話していてもしばしば「人工知能との対話」のことが話題になるようになった。きっかけは、一般にも容易に入手可能になった某社の音声入出力端末である。聞くと、限られた質問の範囲では人間を相手にしたような受け答えが成立し、時刻、天候など、ある種の情報を得るには実際便利なようで、機械相手の会話の新鮮さも手伝って、私の周辺ではおおむね好評である。

こうした新しい情報機器は人工知能を大いに身近なものにしつつあるが、これ以外にも、世界チャンピオンと人工知能の囲碁対局や、自動翻訳の質の急速な向上、自動運転の実用化など、人工知能時代の幕開けを感じさせる事例が増えてきた。ちょっと前ならほら話にしか聞こえなかったようなことが、近い将来実現できてしまうかもしれない。というか、もうできている。思考するシステムを好きなように作成・観察できるという意味では、狭い意味の科学技術だけでなく、心理学、言語学、哲学などにまで関連しうる文理融合研究の絶好の対象であり、強烈に面白い。国や企業が大きな予算を投じてこの方向の研究を後押しするのは当然だ。

このように人工知能が現実味を増す一方で、それがもたらしうる未来は現実の問題として真剣に検討されているのか、不安に思うことがある。まばゆい将来性の向こうにあるかも知れないものに関して、すっきり納得できる

議論を知らない。専門に研究している人に大丈夫ですよと言われても、なかなか素直には受け取れない。昔からSF映画によくでてくるような単純な人類vs人工知能の戦いが起こるとは思わないが、予期しない形、あるいは気づきにくい形で何か深刻な問題が起こるのではないか？

問題は、人工知能がもたらすものを見通すことが困難で、真面目な議論がしたくてもなかなかできないことだ。火薬、医薬品、放射性物質、遺伝子操作、最近では携帯電話など、人類はこれまでに制御の難しいものを利用できるようにしてきたが、人工知能は異質だ。用途が極めて多様である、小規模の投資でもある程度の開発や利用ができる、効果が微妙なものになり得て利用の実態が目に見えにくい、などの性質のために従来の発明・発見と比較して制御困難なものになる（なっている）可能性がある。

これほど面白い研究テーマを漠然とした不安や危険性のために捨てられるものでもないが、人間以外の知能が存在する社会がどういうものになるのか、よくよく未来に思いを巡らしてみるべきときが来ているような気がする。

川島直輝  
(物性研究所)